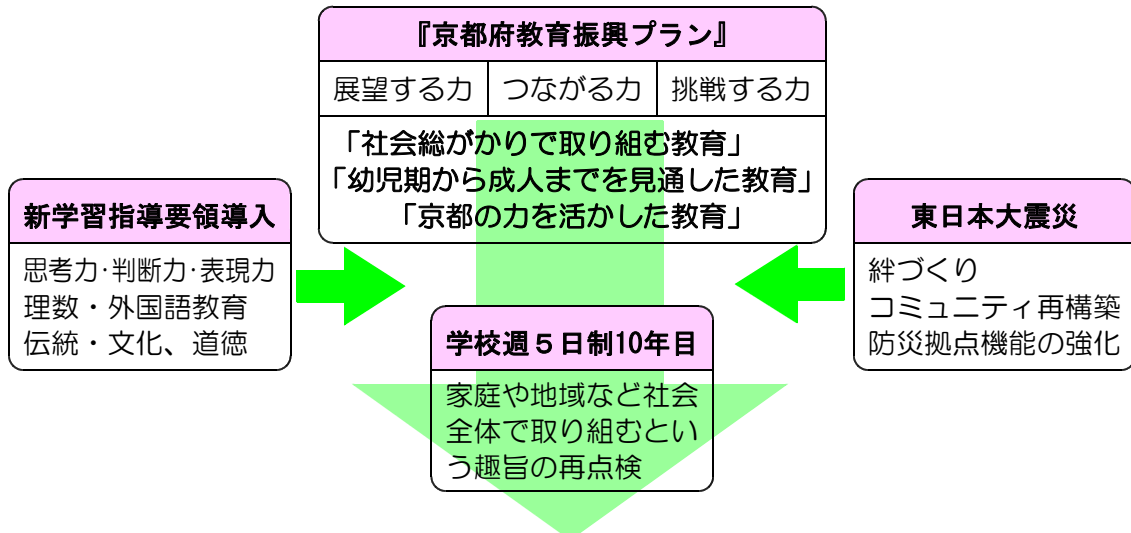


検討の理念と方向性

なぜ土曜日の活用なのか？



プランに示された教育を積極的に進めるために
平日以外の取組(=土曜日の有効活用)を模索

なぜ土曜日の活用なのか？

- ◆平常の教育課程に縛られない柔軟な教育活動が可能
- ◆子どもと保護者がともに学べる機会が増える
- ◆平日ではつなげられない人とつながることができる

土曜日の過ごし方の評価と今後の在り方

<評価>

- ◆子どもは家庭での生活時間は多いが、地域での生活時間が少なく、土曜日をより有効に過ごすための取組の余地がある。
- ◆保護者は子どもの土曜日の過ごし方に概ね満足しており、その上で学校や地域による教育活動にも期待している。
- ◆教職員については平日の過密感や土曜勤務による負担感を解消・軽減する必要がある。

<今後の目標>

- ◆『京都府教育振興プラン』の基本理念を実現するため、学校週5日制の趣旨の下で京都府が進めてきたこれまでの取組状況や成果を踏まえ、土曜日を活用したより多様で魅力的な教育を展開する。

<具体的方策>

- ◆家庭の教育力のさらなる向上
- ◆柔軟で弾力的な教育活動の展開
- ◆学校と地域が連携した取組の強化
- ◆教職員の負担軽減とリンクしたしくみづくり

土曜日を活用した学校教育モデル例

1 モデル例について

土曜日を活用した学校教育を進めるにあたり、どのような活用が考えられるかを簡単にモデル例として紹介するものである。

＜モデル例留意事項＞

- あくまでも取組例を紹介するものであり、この内容にしばられるものではなく、全く新たな観点の取組を行うこともありえる。
- これまで平日に取り組んでいた取組を土曜日にも実施することもありえる。
- モデル例全てを実施するものではなく、モデル例の1つをすることもありえるし、複数のモデル例を組み合わせることもありえる。
- 授業(特別活動除く)=A、特別活動=B、課外活動=Cの区分で記載しているが、同様の内容であっても、進め方や対象児童生徒等を変えることで、その区分も変動する。
- モデル例に記載している「対象学年」や「年間回数」等も参考としてのものであり、学校や地域の実状に応じて柔軟に対応する。



学校が地域と連携して土曜日を活用した取組を行うことの意味を考え、取組を行う一つのきっかけとして作成したもの

2 モデル例マトリックス

活動区分 対象者区分	授業 (特別活動除く) A	特別活動 B	課外活動 C
教員 → 児童生徒	③学びトライアル (小テスト+補習) ③学年横断型学習発表会 ②③もうひとつの小さな研修旅行	③校外学習(遠足) ③団体演劇鑑賞 ②③月1 職場体験学習	③補習アラカルト
教員 → 児童生徒 保護者	①公開授業 ①③保護者参加型授業	①親子映画鑑賞教室 ①③スクール・ライブ・ガイダンス	①部活動見学
教員 保護者 → 児童生徒 (保護者) 地域	②③地域人材による 総合学習 ①②③シティズンシップ 教育	①②子ども見守り ウィーク ①②チャレンジ! 体力測定	①②③土曜振り返り学習
教員 → 保護者 児童生徒 → 地域	①②③研究発表会	①②学校招待会	①②文化・スポーツ交流
教員 → 児童生徒 保護者 → 地域	①②秋のフェスティバル	①②③防災マップづくり	①②〇〇中学校「絆」祭り

※ゴシックの取組はモデル例あり…別紙参照

※①～③は、それぞれの具体的方策に対応

- ①：家庭の教育力のさらなる向上
- ②：学校と地域が連携した取組の強化
- ③：柔軟で弾力的な教育活動の展開

- A-1** ②学校と地域が連携した取組の強化
 ③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称		もうひとつの小さな研修旅行	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ 該当学年児童・生徒全員参加	
		対象学年	小（5年） 中・高（2年）
		年間回数	3回
内 容	<p>職場体験が可能な事業所を複数開拓し、それぞれの体験先を児童・生徒が興味関心に応じて選択。仕事人へのインタビューや職場体験を通じて見たり感じたりしたことをまとめ、プレゼンテーションによる報告会を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆事前学習 <ul style="list-style-type: none"> ・体験先（8～12箇所）に応じて児童・生徒をグルーピング ・職業調べ、インタビューシートの作成 ◆職場体験 <ul style="list-style-type: none"> ・仕事体験 ・仕事人インタビュー ◆事後学習 <ul style="list-style-type: none"> ・礼状書き ・発表資料作成 ◆体験報告会 <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに下級生にプレゼンテーション ・下級生が観点別に評価を行い、感想を述べる 		
参加形態	教員（・児童・生徒） → 児童・生徒		
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ○発表を聞く側の児童・生徒も土曜活用の一環として参加 ○保護者、体験先事業所の方を招いての発表も可能 ○地元商店街や農家によるサポートも期待できる 		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆普段の授業とは異なり、興味・関心や進路・適性を同じくする児童・生徒による意欲的な取組となる。 ◆学校外の大人とコミュニケーションをとることにより、「つながる力」を育成することができる。 ◆仕事の大変さや喜びを、インタビューや体験発表会を通して知ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆体験先の開拓や事前調整 ◆安全面での配慮 ◆バス等の手配 ◆報告会の質の向上

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

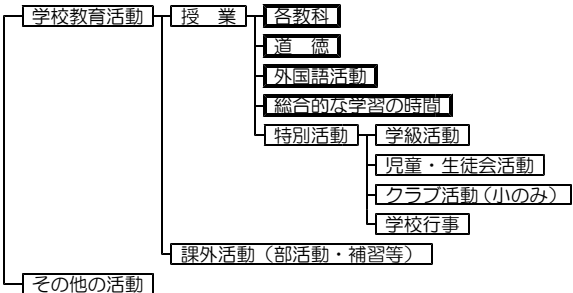
A-2 ①家庭の教育力のさらなる向上

名 称	公開授業		
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ	
		全校児童・生徒参加	
		対象学年	小、中、高 全学年
		年間回数	
		3回（学期に1回）～ 6回（2ヶ月に1回）	
内 容	<p>1 保護者向け授業参観 各学校で平日に実施している授業参観を土曜日に実施</p> <p>2 児童・生徒向け授業見学 中学校：通常の授業を土曜日に実施し、地元の小学校高学年が見学 高 校：通常の授業を土曜日に実施し、中学生が見学</p> <p>3 一般向け公開授業 PTA、学校評議員、他校種教職員、地域の関係者等を対象に授業を公開</p>		
参加形態	<p>1 教員 → 児童・生徒、保護者（参観のみ）</p> <p>2 教員 → 生徒・他校種児童・生徒</p> <p>3 教員 → 生徒・保護者・地域</p>		
そ の 他			

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆さまざまな大人の考えや価値観に触れることにより、子どもの学びが深まる。 ◆保護者が子どもの学びの過程を間近で見ることができる。 ◆授業での気づきを家庭で共有することができ、家庭教育向上の契機となる。 ◆授業改善に外部評価を活用できる。 ◆「中1ギャップ」の解消につながる。 ◆開かれた学校づくり、学校と地域の信頼関係構築につながる。 ◆中学生の進路選択の一助となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆すべての保護者が来校できるとは限らない。 ◆保護者等の参加率向上

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

- A-2 ①家庭の教育力のさらなる向上
③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称	保護者参加型授業	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ 全校児童参加
		対象学年 小 全学年
		年間回数 3回（学期に1回）～
内 容	<p>平常の授業や環境学習、防災教室などのテーマ学習に保護者が子どもとともに参加して授業を実施</p> <p>◆例：身近な環境問題についてのグループ・ディスカッション 紙漉体験&書道教室 調理実習 日本の歴史すごろく 脳トレカルタ、漢字クイズ、… 学年PTA行事として実施</p>	
参加形態	教員・保護者 → 児童・生徒・保護者	
そ の 他		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆さまざまな大人の考えや価値観に触れることにより、子どもの学びが深まる。 ◆保護者が子どもの学びの過程を間近で見ることができる。 ◆授業での気づきを家庭で共有することができ、家庭の教育力向上の契機となる。 ◆開かれた学校づくり、学校と地域の信頼関係構築につながる 	<ul style="list-style-type: none"> ◆参加する保護者の人数把握や打ち合わせが必要。 ◆すべての保護者が来校できるとは限らない。

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

A-4

- ①家庭の教育力のさらなる向上
- ②学校と地域が連携した取組の強化
- ③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称	研究発表会		
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ	
		全校児童・生徒参加	
		対象学年	小、中、高 全学年
年間回数	3回程度 (学期に1回)		
内 容	<p>保護者や地域の方々に来校してもらい、児童・生徒の学習発表を見学してもらう。</p> <p>◆例 国語：作文、詩、俳句、短歌等の作品の発表 社会：調べ学習の発表 理科：自由研究の発表 英語：暗唱文の発表、スキットの発表 総合：体験学習のまとめの発表 など</p>		
参加形態	教員・児童・生徒 → 保護者・地域		
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ○内容によって授業時間を弾力化（20～100分等） ○学級単位、学年単位等、さまざまな形態での発表 ○通常の授業で実施しているものを発表 ○1教科だけでなく、複数教科、全教科での発表 ○高校においては、政策提案等のプレゼンテーション等も 		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆定期的な授業公開によって授業改善に寄与 ◆保護者や地域の方々に見てもらい、発表に対する評価や感想を得ることにより、児童・生徒の学習へのモチベーションが高まる。 ◆単なる授業参観ではなく、子どもたちの活躍の場を見ることができると、保護者、地域の方の参加、絆づくりが期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆公開のためだけの単発の取組になると学力向上につなげにくい。 ◆発表を中心に年間指導計画を立てると、普段の授業を圧迫してしまう。

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

- A-5** ①家庭の教育力のさらなる向上
 ②学校と地域が連携した取組の強化

名 称		秋のフェスティバル	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ 該当学年児童全員参加	
		対象学年	(幼)、小 1・2年生
		年間回数	3回
内 容	<p>教科「生活科」で幼稚園児や保育園児を招待し、保護者、地域の方、園児とともに楽しむ合同授業を実施。事前のオリエンテーションや探検も行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆幼稚園・保育園児には「もうすぐ1年生」体験入学推進事業としても位置付ける。 ◆オリエンテーション <ul style="list-style-type: none"> ・交流ゲーム等により園児と児童のグルーピング ・合同で秋のフェスティバルを計画 ◆「秋の公園探検隊」 <ul style="list-style-type: none"> ・公園を探検して秋（どんぐり、落ち葉など）を探すネイチャーゲームをする。 ・見つけたものを持ち寄り、遊びコーナーでの遊具等を作成 ・地域の人に「秋のフェスティバル」の招待状をかく。 ◆「秋のフェスティバル」 <ul style="list-style-type: none"> ・地域の人を含め、コーナー遊びを楽しむ。 ・「親のための応援塾」として、秋の食材を利用したおやつ作りも実施 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>※「もうすぐ1年生」体験入学推進事業とは… 保育所、幼稚園から小学校への円滑な接続を図るため、小学校において次年度の新1年生を対象とした1週間程度の体験入学等を実施。</p> <p>※親のための応援塾とは… 小学校就学前の子どもを持つ保護者などが語り合い、交流し、学び合うことで子育ての不安や悩みをやわらげ、親同士のネットワークづくりを進める取組。</p> </div>		
参加形態	教員・児童・保護者・園児・地域		
その他	○平日にも「秋のフェスティバル」に関する授業を実施		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆連続的な取組の設定は、幼稚園教員、保育士と学校教員の指導に対しての共通理解が深まり、幼児と児童の交流も深まる。 ◆幼小の円滑な接続のカリキュラムを考えた体験プログラムや教員の研修が進む。 ◆園児が、ねらいをもって参加できる。 ◆学園児の引率に際し、保護者や地域の協力が得やすい。 ◆複数の園、保育所から一斉に参加できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆任命権者の異なる幼稚園教員や保育士の勤務の整理 ◆オリエンテーションから本番までの実施スパンが長くなる場合、幼児、児童の学習意欲の持続が困難

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

- B-2** ①家庭の教育力のさらなる向上
③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称	スクール・ライフ・ガイダンス									
教育課程内外の位置付け		<table border="1"> <tr> <td colspan="2" data-bbox="992 291 1383 349">児童・生徒の参加イメージ</td> </tr> <tr> <td colspan="2" data-bbox="992 349 1383 394">該当学年児童・生徒全員参加</td> </tr> <tr> <td data-bbox="992 416 1072 506">対象学年</td> <td data-bbox="1072 416 1383 506">小(1・3・5年生) 中(1年生)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="992 528 1072 618">年間回数</td> <td data-bbox="1072 528 1383 618">1回(4月)</td> </tr> </table>	児童・生徒の参加イメージ		該当学年児童・生徒全員参加		対象学年	小(1・3・5年生) 中(1年生)	年間回数	1回(4月)
	児童・生徒の参加イメージ									
	該当学年児童・生徒全員参加									
対象学年	小(1・3・5年生) 中(1年生)									
年間回数	1回(4月)									
内 容	<p>学校と保護者の共通理解のもと、児童・生徒がより充実した学校生活を過ごせるよう、学齢に応じた学習や生活に関するオリエンテーションや交流行事などを児童・生徒と保護者を対象に実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆学習オリエンテーション <ul style="list-style-type: none"> ・ノートの使い方 ・辞書の使い方 ・予習・復習の仕方 ・「予習→模擬授業→復習」のシミュレーション指導 ◆生活オリエンテーション <ul style="list-style-type: none"> ・校則について ・部活動・ボランティア活動について ・健康と食事 ・交通安全教室 ・あんしんネット教室 ・非行防止教室 ◆校歌練習 ◆保護者講話「私たちの学校生活～一枚の写真から～」 ◆生徒・児童会長講話「涙の卒業式を迎えるために」 <ul style="list-style-type: none"> ・本校の学校行事や特色ある取組 ◆交流行事 <ul style="list-style-type: none"> ・バーベキュー、飯ごう炊さん、球技大会 									
参加形態	教員 → 児童・生徒・保護者									
そ の 他	○学校外での施設を利用するなどの工夫									

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆児童・生徒の発達段階に応じた新たな生活ステージに向けた教育方針等について学校・家庭の共通理解を図ることができる。 ◆教員と保護者の信頼関係を早い時期に築くことができる。 ◆家庭学習の方法や通学、食事のあり方等、家庭の教育力向上つなげる取組が可能。 ◆交流行事等により、保護者がその後のPTA行事等に参加しやすい環境をつくることできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆参加が不可能な保護者へのサポートが必要 ◆児童・生徒と保護者を収容できる施設が必要 ◆交流行事等、メニュー的には半日でこなすことができない。

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

- B-3** ①家庭の教育力のさらなる向上
 ②学校と地域が連携した取組の強化

名 称		子ども見守りウィーク(通学路安全確認DAY)	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ	
		全校児童参加	
		対象学年	小 全学年
	年間回数	1回 (5月中旬から下旬)	
内 容	<p>子どもたちを見守り、登下校時のあいさつを励行する強化週間を設定し、週間中の最初の土曜日に次の取組を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆登 校：保護者と児童と一緒に登校 ◆1時間目：登校班ごとに通学路の安全マップを作成 ◆2時間目：1～3年：授業参観(道徳・生活科等) 4～6年：非行防止教室 ◆3時間目：児童会総会 ・児童、PTA、地域がそれぞれ取組をアピール ◆下 校：保護者と児童が安全マップを確認しながら下校する。 		
参加形態	教員、児童、保護者、地域		
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ○登校後すぐの休み時間も作業時間に組入れるなど、授業時間を柔軟化 ○地域の民生児童委員、地区の役員等と連携 		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆子どもとともに通学路を歩くことで、保護者が普段は気づかない危険箇所を確認できる。 ◆地域の方の思いや考えが子どもや保護者に伝わる機会となる。 ◆保護者と子どもが共通の話題で話し合うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆大規模校では人数的に全校実施が困難(登下校) ◆登校距離の長短で保護者、児童の取組度合が変化する可能性 ◆保護者が参加できない児童への対応

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

B-3

- ①家庭の教育力のさらなる向上
- ②学校と地域が連携した取組の強化

名 称		チャレンジ！体力測定	
教育課程 内外の位置 付け		児童・生徒の参加イメージ	
		全校児童・生徒参加	
		対象 学年	小、中 全学年
年間 回数	1・2回 (春・秋)		
内 容	<p>全校児童・生徒の新体力テスト測定、保護者や家族の体力測定を合同で実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆教員：主に児童・生徒の体力測定を実施 ◆地域の指導者：年齢に応じた体力測定を保護者やその家族に実施 		
参加形態	教員・地域の指導者 → 児童・生徒・保護者・その家族		
そ の 他	○現状として、体力測定は「学校行事」として位置づけている。		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆子どもと保護者、家庭が体力や健康について意識を共有することができる。 ◆子どもの体力の状況を保護者が把握し、自らの体力実態を知る機会となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆安全な測定場所の確保 ◆けが等発生時の校内救急体制の整備

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

- B-4** ①家庭の教育力のさらなる向上
②学校と地域が連携した取組の強化

名 称	学校招待会	
教育課程内外の位置付け		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>全校児童・生徒参加 (小は低学年除く)</p> <p>対象学年 小、中、高 小の高学年以上</p> <p>年間回数 1回</p>
内 容	<p>他校種の児童・生徒、保護者、地域の方等を学校に招待し、各学級・講座の学習や部活動の成果を発表。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆学校探検ラリー <ul style="list-style-type: none"> ・学校案内マップ、スタンプカードを来校者に配付し、ラリー形式で発表ブースを見学してもらう。 ・授業、部活動における成果物を教室内に掲示し、生徒が説明・発表。 ◆全体説明会 <ul style="list-style-type: none"> ・歓迎演奏、演舞 ・児童・生徒会作成プロモーションビデオの上映 ・児童・生徒による学校紹介 ◆イベント <ul style="list-style-type: none"> ・著名人による教育講演会 ・映画上映会 ・文化祭最優秀演劇発表 	
参加形態	児童・生徒（・教員） → 他校種生徒・保護者・地域	
そ の 他	<p>○児童・生徒の実行委員会で運営し、教員はサポート</p> <p>○時期・校種によっては、教科として実施することも検討</p> <p>○高校では学校説明会とセットで実施</p>	

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆開かれた学校づくりの推進 ◆児童・生徒の活動成果の発表の場を設けることにより、ゴールに向けた系統立てた指導が可能 ◆学校外の人に伝え、評価される体験を通して、自己肯定感をもち、モチベーションの向上につながる。 ◆様々な人と接することにより、コミュニケーション能力の育成を図ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆大規模校での取組は工夫が必要 ◆すべての生徒を主体的に参加させる工夫が必要。

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点	

B-5

- ①家庭の教育力のさらなる向上
- ②学校と地域が連携した取組の強化
- ③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称	防災マップづくり		
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ	
		全校児童参加	
		対象学年	小 全学年
年間回数	1回		
内 容	<p>自分たちの住むまちを探検し、身近にある危険な場所や防災施設・設備などを実際に見て回り、その結果を子どもの視点・意見・感性によって模造紙上の地図にまとめ、グループごとに発見したことや気付いたことなどを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆通学路を中心に5～6名のグループで探検 ◆避難場所や危険箇所のチェック・写真撮影 ◆気づいたこと等を地図に落とし込み、防災マップを作成 ◆発表 <p style="text-align: center;">※保護者・地域の方は各グループの引率、各地点での立哨、マップ作成補助等にあたる</p>		
参加形態	教員・地域・保護者 → 児童・保護者		
そ の 他	<p>○地域の地理・歴史等について事前学習</p> <p>○3年生以上は「総合的な学習の時間」として実施</p>		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆社会全体の防災意識の向上を図ることができる。 ◆土曜日に実施することにより多数の協力を得られ、学校と地域がつながる一助となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆毎年同じ内容の場合、マンネリ化が懸念される。 ◆防災の指導に関して、保護者・地域との共通理解の徹底が必要である。 ◆1・2年生の活動を教育課程上のどこに位置付けられるか。 ◆探検時の全校児童の把握が困難である。

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

C-1 ③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称		補習アラカルト	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ	
		全校生徒参加	
		対象学年	小（高学年） 中・高（全学年）
	年間回数	20回程度（月2回）	
内 容	<p>児童・生徒の学習実態や希望に応じてきめ細かな講座のメニューを用意し、児童・生徒が自らの興味・関心や習熟の度合いに応じて講座を選択し、補習を受ける。教科の補習、作業的な学習、自習等を柔軟に実施するとともに、保護者を含む面談や中高双方向の進路イベント等を開催する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆個別講座による補習 <ul style="list-style-type: none"> ・講座の難易度と到達目標、学習の内容を記したシラバスを作成（教員） ・シラバスの配布と各講座のオリエンテーション（教員） ・担任またはチューターと相談の上、講座を選択・登録・受講（児童・生徒） ◆クラス単位の補習 <ul style="list-style-type: none"> ・社会、理科、その他作業を中心とした学習、自習時間 ・自習等と並行して個人面談や三者（生徒・保護者・教員）面談を実施 ◆複数の高校を招き、進路関係のイベントを実施（学期に1回程度） 		
参加形態	教員（・地域） → 生徒（・保護者）		
そ の 他	<p>○出勤する教員数を抑制するには、2時間連続補習などの設定が必要。</p> <p>○発展講座はクラス人数を超えた編成とするなどにより、トータルとして講座の伸びを抑える。</p> <p>○目的意識をもって臨ませるため、シラバスの事前配付と希望講座の登録などを工夫。</p>		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆成績上位層を伸ばし、つまずきのある生徒をサポートする等、日常の授業ではできない学習指導に時間をかけることができる。 ◆面談の時間を確保することにより、より丁寧な進路指導等、生徒と向き合う時間を確保できる。 ◆アラカルト方式による希望講座の選択により、モチベーションの向上が期待できる。 ◆他校種の生徒、教職員と触れ合うことにより、進路意識の高揚を図ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆時間割の調整が必要であり、大規模校では実施困難 ◆効果を得るためには月2回以上の実施が必要 ◆学習集団がふだんの授業と異なるので、教員が生徒を把握することが困難 ◆面談が多くなると担任の授業が不可能 ◆成績中位層の参加目的が曖昧

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

- C-3** ①家庭の教育力のさらなる向上
 ②学校と地域が連携した取組の強化
 ③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称		土曜振り返り学習(どよスタ)	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ 希望者による任意参加	
		対象学年 小、中 全学年	年間回数 3回～(各学期1回) (中はテスト前5回)
内 容	<p>教員を目指す高校生や大学生、また、地域のボランティアが国語・社会・数学(算数)・理科・英語の補習を実施する。発展的内容については、大学院生等にも協力を依頼。</p> <p>◆「ふりスタ」の活用</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>※中1振り返り集中学習「ふりスタ」とは… 中学1年生の早期に基礎基本を徹底し、学習のつまずきの解消を図るとともに、主体的に学習に取り組む意欲・態目的度を身に付けさせるため、中学1年生を対象にした集中学習。小学校段階の基礎基本を徹底する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施時期：中学1年の早い時期(4～8月) ・実施教科：国語・算数等 </div>		
参加形態	地域・保護者(・教員) → 児童・生徒		
そ の 他	<p>○1教科当たりの授業時間は20～40分等、柔軟に調整</p> <p>○参加率を上げるため、補習時間前に映画などを上映したり、部活動開始時間前に補習時間を計画する等の工夫</p>		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆学習のつまずきを少しでも解消することが可能 ◆放課後に実施していた補充学習を土曜日に移動することにより、平日の放課後を有効に活用することができる。 ◆ボランティア、補助者等の人材確保が平日よりも確保しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆北部地域ではボランティア、保護者等の人材確保が困難 ◆振り返り学習の必要な生徒が参加するとは限らない。 ◆自主参加であるため、参加率向上の工夫が必要

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

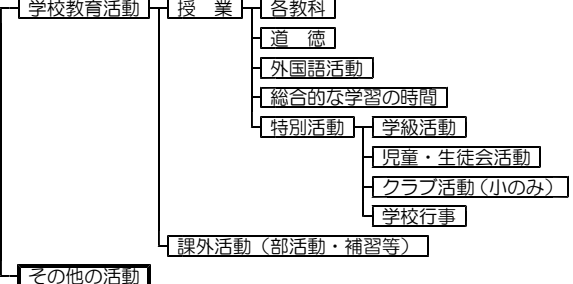
- C-4** ①家庭の教育力のさらなる向上
 ②学校と地域が連携した取組の強化

名 称		文化・スポーツ交流	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ 全校児童・生徒参加(中・高は一部)	
		対象学年	(幼)、小、中、高 全学年
		年間回数	年1～9回程度 (最大月1回)
内 容	<p>1 部活動体験教室 中学生や高校生が地域の園児や小学生と、部活動指導や運動遊びを通して交流を図る。</p> <p>1-①園児や小学生を中学校や高校に招待 1-②中学生や高校生が幼稚園・小学校に出向き、出前教室を実施 1-③種目ごとに小学校(幼稚園)または中学・高校のそれぞれの施設で実施</p> <p>2 地域合同クラブ 中学生や高校生が地域住民や地域クラブ等と合同で、練習や簡易ゲームを通じて交流する。</p> <p>3 発表会・公演会等 文化系部活動の練習成果(体育祭・文化祭での活動含む)を、地域の保育園や小学校、公民館等で発表。コンサート、茶会、演劇公演など。</p>		
参加形態	生徒・教員 → 園児・児童・保護者・地域		
その他	○活動している部活動単位で参加し、活動時間は2～3時間程度		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆地域住民との交流により、新たな人間関係やコミュニケーションづくりの機会となる ◆園児、児童、生徒間の異世代交流により、子どもたち同士の連帯感の醸成に寄与 ◆地域の体育・文化活動の活性化に寄与 	<ul style="list-style-type: none"> ◆施設等の問題から大規模校での実施困難 ◆園児、小学生、地域住民に対する安全配慮 ◆中・高の部活動に参加していない生徒への対応 ◆安全面に配慮したスペース確保 ◆中学1年生の参加は園児、児童への指導役としては困難 ◆指導者間の意思疎通

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

- C-5** ①家庭の教育力のさらなる向上
②学校と地域が連携した取組の強化

名 称	〇〇中学校「絆」祭り			
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ 希望者による任意参加		
		対象学年	小、中 全学年	
		年間回数	1回	
内 容	<p>中学校区内の小中学校のPTAや町内会などが連携し、模擬店等さまざまな催しを中学校を会場として開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ステージ発表 <ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒が部活動や文化祭等で取り組んだ内容の発表 ・PTAや地域の団体等によるコーラス等の発表 ◆PTAや町内会による模擬店、リサイクルバザー、制服交換会（中学校）等 ◆地域のボランティア団体等によるブース ◆地域の文化的活動を実施している団体（PTA含む）の発表会等 ◆各小中学校のブースを設け、各学校概要・取組紹介 			
参加形態	保護者、地域、児童・生徒、教員			
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ○教員は運営スタッフとしては最小限の関与 ○地域の回覧板等を通じ、幅広く広報 ○地元企業や高校、大学なども参加を呼びかけ 			

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆異世代交流が促進される ◆小中連携の強化を図ることができる ◆学校と地域社会の連携強化を図ることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ◆財源や運営スタッフの確保 ◆児童・生徒の参加率をあげる方策の検討 ◆発表等のない児童・生徒への対応

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点

平成24年度「土曜日を活用した教育の在り方実践研究事業（仮称）」実施要項（案）

1 趣旨

京都府内の公立小・中学校において、土曜日を活用したより多様で魅力的な教育活動を展開するために、学校週5日制における児童・生徒の土曜日の生活実態や地域の実情、保護者の意識を踏まえ、新学習指導要領の全面実施等、新たな教育環境の変化に対応した、土曜日を活用した効果的な教育活動の実施に向け、実践的・専門的な研究を行う。

2 指定期間

平成24年4月1日から平成25年3月31日まで（1年間）

3 指定の手続き

- (1) 本事業の実施を希望する市町（組合）教育委員会は、別紙様式により、事業計画書を京都府教育委員会教育長（以下「教育長」という。）に提出すること。
- (2) 教育長は、事業計画書を審査するとともに、必要に応じて事情を聴取の上、土曜教育実践研究指定校として指定する。
- (3) 市町（組合）教育委員会は、研究の実績を別途指定する様式で教育長あて報告すること。

4 事業の実施方法

- (1) 土曜教育実践研究指定校は、地域や学校等の実態や環境に応じて「家庭の教育力のさらなる向上」、「学校と地域が連携した取組の強化」、「柔軟で弾力的な教育活動の展開」につながる土曜日における学校教育活動を計画し、別添モデル例を参考にしながら実践研究を行う。
- (2) 実施する学校教育活動は、次のいずれかによるものとする。
 - ①教育課程に位置づける授業
 - ②課外活動
- (3) 教育課程に位置づける授業として実施する場合において、次のいずれにも該当する場合は、児童及び生徒の休業日の振替を行わない。
 - ①土曜日の午前中であること。
 - ②各月2回を上限とすること。
 - ③公開授業であること。
 - ④校内の指導体制を確立するとともに、保護者及び地域住民等に対して趣旨説明を行うなど、十分な理解を得ていること。
 - ⑤社会教育関係団体、社会体育関係団体等との調整が十分に図られていること。
 - ⑥上記①から⑤のほか、教育効果等総合的に判断し必要と認められる場合
- (4) 土曜教育実践研究指定校は、府教育委員会が設置する「土曜日を活用した教育の在り方連絡協議会（仮称）」において、必要に応じて研究経過の報告等を行う。
- (5) 土曜教育実践研究指定校は、府教育委員会及び市町教育委員会の指導助言のもとに実践研究を行う。
- (6) 実施にあたっては、条例等に基づき、週休日の振替等を行うとともに、教職員の理解と協力を求め、勤務負担軽減に努めなければならない。

5 その他

この要項の実施について必要な事項については、別に定める。